

◆連載

いま留萌むかし 第四十三話

●「留萌の語源」

「留萌」という地名が公式に定められたのは明治二年八月十五日のことである。当時蝦夷地と呼ばれていたこの島を明治維新によって成立した新政府は、東海道や山陽道のよ

うな古代の名称を受け継いで、新しい第八番目の「道」として「北海道」という名称にした。

この時同時に十勝国とか天塩国のような国名と郡名を一緒に制定した。この中に留萌郡という呼称が正式に使われたのである。そして、最初の読み方は「ルルモエ」と呼んだ。

それ以前、北海道が蝦夷地だった時代はどうであったろうか。現在、一番古く留萌らしい地名が出てくるのは、寛文元年（一六六一）に松前藩主高広の命令で吉田作兵エが全蝦夷地を巡回して作った

「御国絵図」に「つるをふへ」という地名がのっている。その三十九年後の元禄十三年

（一七〇〇）に松前藩が幕府に提出した「元禄郷帳」の中に「つるおつへ」という地名が見受けられる。その後「留萌」となるまで一貫して「ルルモツペ」とよばれてきた。

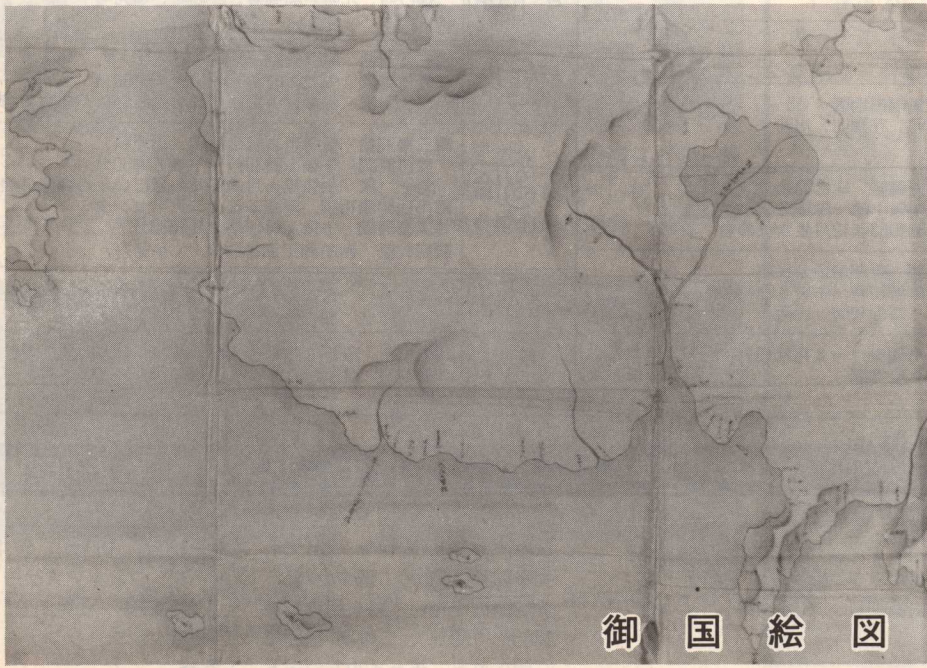
もちろん、この「ルルモツペ」というよび方は北海道各地の地名と同じようにアイヌ語である。ではどのような意味なのか諸説を見てみよう。最初にルルモツペの語源について書き残したのは上原熊次郎というアイヌ語の通曉である。彼はその著「蝦夷地名考并里程記」の中で「ルルモツペ 夷語ルルモツペの略語なり、即ち潮の静かに入る所と訳す。満潮の節此川へ潮の入る故此名あり」と書いています。

また、「西蝦夷日誌」では「ルルモツペ 本名ルルモツペと云。ルルは汐。モは静ツペはある、入る。ペは水の事也。此川自然と奥深く汐入る故に訳く。是運上屋元の川の名也。今此地の惣名となる。また、「北海道蝦夷語地名解」をあらわした永田方正は、「ルルモツペ 潮静川、「ルル」ハ潮、「モ」ハ静、「ペ」ハ川ナリ 此川潮入りテ流レ遅シ故ニ留萌村ト稱ス。一と解している。

昭和二十五年版の「北海道駅名の起源」では「ルル・モ・ベツ 瀬の静かな川」としているが、昭和十九年版になると「この地は古くルル、パ（海のかみで）」といったらしい節

がある。留萌はおそらくルルパのモイ（湾）だったのではないだろうか。普通に留萌の語源とされているルルモツペは、この湾にそそぐ川の名で語源はルルモイ・ベツあるいはルルブンベツ（ルルパの川）の

転訛と思われる。以上代表的なルルモツペの地名解釈をあげてみた。どれも本当の意味かは判断することはできない。ただ、「ルルモツペ」は世界に唯一の地名であることは確かである。



御国絵図